

令和4年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	公益財団法人宮崎県立芸術劇場	
施 設 名	宮崎県立芸術劇場	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業	
内定額(総額)	17,333	(千円)
公演事業	17,333	(千円)
人材養成事業	0	(千円)
普及啓発事業	0	(千円)

(1) 令和4年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	THE SIXTH SENSE	7月3日	出演／上野星矢、金子亜未、西川智也、長哲也、濱地宗、岡田奏、曲目／プーランク：六重奏曲、他	目標値	520
		アイザックスターホール		実績値	298
2	Let's 和の音♪「邦楽と相撲」	8月20日、21日	出演／松田哲博、呼出し邦夫、竹澤悦子、神田佳子、織田麻有佐、内容／相撲甚句、新作初演、他	目標値	500
		イベントホール、都城市総合文化ホール大ホール		実績値	226
3	環 ROY 『遊ぶことば』	9月11日	出演／環 ROY、内容／(前半)参加型パフォーマンス「Fine Game」、(後半)環 ROY ソロ・パフォーマンス	目標値	80
		イベントホール		実績値	98
4	こどももおとなも劇場#7 茂山千五郎家「狂言」	10月28日～30日	出演／茂山千五郎、茂山茂、網谷正美、松本薫、井口竜也、山下守之、演目／解説・狂言「蝸牛」、他	目標値	1,200
		演劇ホール、門川町総合文化会館		実績値	676
5	パイプオルガン プロムナード・コンサート「オルブラ」	6/25、9/17、12/17	出演／(vol.171)三原麻里、(vol.172)永見亜矢子、(vol.173)山口綾規、(共通)伊豆謡子、他	目標値	600
		アイザックスターホール		実績値	741
6	ニュー・イヤーズ・コンサート2023 ～ピアソラ・ザ・ファイナル～	1月15日	出演／三浦一馬、上野耕平、大萩康司、宮田大、山中惇史、曲目／ピアソラ：来たるべきもの、他	目標値	725
		アイザックスターホール		実績値	1,135
7	加藤昌則の「聴かぬならきかせてみせよう！クラシック」	12月24日、1月21日	出演／(共通)加藤昌則、(第1回)三宅理恵、(第2回)川田知子、須田祥子、向井航、他	目標値	800
		イベントホール、演劇ホール		実績値	415
8	ひなたのバロック	11月6日、2月5日	出演／(共通)大塚直哉、(#3)小林亜起子、市瀬陽子、(#4)佐藤康太、宇治川朝政、西谷尚己、藤崎美苗	目標値	360
		イベントホール		実績値	269
9	おんがくのおもちゃ箱シリーズ Part. 15/16	6月12日、3月5日	出演／(Part. 15)伊豆謡子、黒木奈津季、大西映光、衛藤和洋、(Part. 16)中川賢一、鶴木絵里、熊谷愛香、他	目標値	1,000
		演劇ホール、アイザックスターホール		実績値	1,008
10	「新 かぼちゃといもがら物語」#7『神舞の庭』	3/1～5、3/11～12	演目／「神舞の庭」、作／長田育恵、演出／立山ひろみ、出演／大沢健、東風万智子、石川湖太郎、他	目標値	882
		イベントホール、東京芸術劇場シアターウエスト		実績値	844

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>宮崎県立芸術劇場は、県民文化の拠点として、舞台芸術を中心に多様な文化活動を促進し、文化の香り高い地域づくりと心豊かな県民生活の創造に寄与することを目的に平成5年に設置され、平成18年度より当財団が指定管理業務を受託し、管理運営にあっている。</p> <p>令和4年度の事業実施に際しては、「第四期（令和3年度～令和7年度）指定管理申請書」、及び「みやざき文化振興ビジョン（改訂版）」（平成29年7月）に基づき、“より親しみやすく”“裾野を広げる”を重点目標に掲げ、県民の「みる」「つくる」「つながる」の3つの拠点となることを目指した。</p> <ul style="list-style-type: none">●舞台芸術の拠点形成 「みる」<ul style="list-style-type: none">・ホールを最大限に活かした当劇場だからこそできる公演による、県内外からの来場者増・感受性豊かな子どもたちに良質な舞台芸術に触れる機会を提供●文化創造の拠点形成 「つくる」<ul style="list-style-type: none">・宮崎の地域資源、人材を活用した宮崎オリジナルの舞台公演を創造し、「宮崎の今」を発信・宮崎で活動している表現者に活躍の場を提供し、その活動を支援・子どもたちの想像力を育み、本県の未来を担う心豊かな人材を育成●地域文化の拠点形成 「つながる」<ul style="list-style-type: none">・県内各地域へ舞台芸術を届け、県内他施設と連携して地域の文化力向上を支援・県内の表現者を起用することによる舞台芸術への親近感の醸成 <p>上記の方針に基づき、令和4年度の当劇場の公演事業では、音楽、演劇、伝統芸能などのジャンルで、解説付きの公演、親子で楽しめる公演、季節に合わせたコンサート、気軽にパイプオルガンの音色を楽しめる公演、ラップの公演等を実施してきた。</p> <p>また、集客面では新型コロナウイルス感染症の影響を受けてはいるが、公演の中止・延期等はなく、当初の計画通りに事業を実施することができた。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>令和4年度も、長引くコロナ禍の中で自粛せざるを得なかった事業活動の再開に向けての1年だった。各種団体の感染対策ガイドラインや先事例を参考にしながら、事業実施時の感染症対策の経験を積み重ね、感染症対策と事業実施の両立を図ることができた。</p> <p>これは、県内の文化芸術団体においても同様で、当劇場に対して事業実施時における感染症対策等についての相談や問い合わせがあるなど、県の文化振興の中核を担う当劇場が事業を実施していくことが、県内の文化芸術団体の活動再開を後押しする効果ももたらしていたといえる。</p> <p>県民の「コロナ禍における公演開催」に対する意識も徐々に変わり始めており、公演アンケートでは「このような状況だからこそ文化の大切さを実感することができた」という意見が多数見られた。感染症対策を講じてできる限り事業の実施・継続を図ってきたことの成果ととらえることができる。</p> <p>困難な状況において形成された「作り手・届け手」と「来場者・参加者」との関係性は、新型コロナウイルス感染症が収束した後にこそ、その効果が発揮されてくるものと考えている。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

当劇場においては、(1) 公演来場者へのアンケート と (2) 事業担当者による事業終了後の自己分析の2つの方法により、事業効果を測定している。

(1) 公演来場者へのアンケート

集計結果は下記のとおり

助成対象公演		アンケート集計												
		SIXTH SENSE	和の音	環ROY	こどもおとなも劇場	オルブラ (3公演平均)	ニューイヤー コンサート	加藤昌則	ひなたのバロック (2公演平均)	おんがくのおもちゃ箱	神舞の庭 (7公演平均)	全公演平均		
回収率		48.0%	58.0%	33.0%	51.0%	47.0%	44.0%	43.0%	47.0%	11.0%	46.0%	53.5%		
年齢	20代未満	9.7%	1.5%	15.6%	12.7%	10.1%	7.3%	17.0%	9.0%	7.6%	5.5%	9.2%	20代未満	57.0%
	20代	2.8%	1.5%	9.4%	3.5%	3.2%	2.8%	1.8%	3.8%	11.8%	6.8%	4.7%	20代	
	30代	7.6%	3.2%	43.8%	3.9%	5.8%	5.0%	4.6%	4.1%	44.7%	8.5%	12.2%	30代	
	40代	9.7%	11.3%	28.1%	16.1%	15.2%	9.3%	13.3%	15.5%	19.2%	16.5%	15.3%	40代	
	50代	24.1%	9.5%	0.0%	21.9%	20.6%	22.6%	15.6%	17.5%	4.5%	20.5%	15.6%	50代	
	60代	25.5%	20.5%	0.0%	14.8%	25.0%	27.1%	19.0%	17.5%	6.9%	28.6%	19.2%	60代	
	70代～	20.6%	51.0%	0.0%	27.1%	18.2%	24.4%	28.8%	31.1%	5.2%	13.3%	22.7%	70代～	
	無回答	0.0%	1.5%	3.1%	0.0%	1.9%	1.5%	0.0%	1.5%	0.1%	0.3%	1.1%	無回答	
		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.1%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		
来館回数	初めて	21.7%	11.4%	20.0%	9.8%	10.7%	8.1%	31.5%	4.8%	13.6%	19.2%	14.6%	初めて	41.9%
	1～2回	41.3%	40.7%	56.7%	34.6%	32.9%	30.1%	36.9%	18.5%	54.1%	38.0%	37.5%	1～2回	
	3～5回	14.0%	24.2%	13.3%	27.5%	32.6%	37.8%	17.9%	41.1%	19.4%	22.1%	26.1%	3～5回	
	6～10回	15.4%	11.8%	3.3%	15.7%	13.3%	12.5%	13.7%	11.3%	5.8%	10.1%	10.0%	6～10回	
	11回以上	7.6%	4.7%	0.0%	9.1%	7.2%	7.5%	0.0%	22.2%	3.7%	5.8%	7.1%	11回以上	
	無回答	0.0%	7.2%	6.7%	3.3%	3.3%	4.0%	0.0%	2.1%	3.4%	4.8%	3.4%	無回答	
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	84.1%	

来場者の年齢構成 目標：50代以下 50%以上 実績：50代以下 57.0%

来館回数 目標「初めて」「1～2回」来館 25%以上 実績：52%

入場率 目標：平均 70% 実績：63.8%

居住地（宮崎市以外からの来場者） 目標：30%以上 実績：22.3%

引き続き、新型コロナウイルス等により入場者数はコロナ禍以前の状況まで回復しているとは言えず、本助成対象事業の入場率も、全体としては目標の70%を達成することができなかった。

来館回数及び来場者の年齢構成では目標を上回っている。観客層の高齢化に伴い若い世代の獲得が課題となっているが、ラップの公演や親子向けの公演の実施により、観客層の拡大を図ることができた。一方、邦楽の公演等では比較的来場者の年齢層は高くなっており、助成対象の各事業が各年代に向けて幅広く構成されていることが伺える。

(2) 事業担当者による自己分析

事業終了後に企画、広報の各担当者により、次の指標について取りまとめ、振り返りを行っている。

○ 公益性、共感性、普及性、実現性、計画性、自立性、先駆性

→ 各事業とも概ね「十分達成できた」「ほぼ達成できた」の自己評価となっているが、いくつかの事業において「自立性」で低い評価となっている。やはり、長引く新型コロナウイルスの影響によるものと思われる。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

令和4年度は、新型コロナウイルス感染症の影響による公演の中止、延期はなく、当初の計画通りの事業期間で事業を実施することができた。

創造型の公演事業である「新 かぼちゃといもがら物語#7『神舞の庭』では、事業期間が他事業と比べて大きくなっているが、プロデュース公演であり約1ヶ月の稽古期間を確保したこと、また、例年の宮崎公演に加えて、東京公演（東京芸術劇場）を実施したためである。

その結果、宮崎県民からは見過ごされやすい地域社会の懐の深さが鋭く描き出された作品となり、多くの観客から満足と共感を得ることができたとともに、県外に向けて、宮崎が抱える地域課題や宮崎の魅力を、また、地域においても質の高い演劇作品を創造していることを発信することができた。

「ひなたのバロック」「パイプオルガン プロムナード・コンサート」「加藤昌則の『聴かぬならきかせてみせよう！クラシック』」においては、年間2~3回実施するシリーズ公演とすることで、観客の定着や鑑賞機会の拡大を図っている。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

●公演事業	【収入】	申請	11,740,000円	【支出】	申請	53,669,000円
		実績	10,943,930円		実績	47,061,542円

収入は、申請額に対して93%の実績で、ほぼ計画通りに進行することができた。

支出は、申請額に対して88%の執行。支出減の理由としては、各公演において航空券の「早割」利用により交通費を低価格に抑えることができたことが大きい。出演者・スタッフの移動スケジュールを早期に確定させることで、経費の削減に努めることができたといえる。

首都圏や関西圏からの出演者・スタッフを招聘することが多い当劇場において、事業費に交通費の占める割合は大きく、早めの制作進行を心がけることが、事業費の適切な執行につながっている。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

当劇場が実施する事業プログラムには、「県の芸術文化の拠点」としての高い芸術性が求められることから、劇場スタッフに加え、長年にわたり宮崎県の音楽界を牽引してきた桐原直子氏に音楽アウトリーチ事業アドバイザーを、宮崎出身で東京を拠点に演出家として活躍する立山ひろみ氏に演劇ディレクターを委嘱し、より専門的な見地から企画、運営に当たっての指導、助言をもらっている。

また、NHK エンタープライズと事業アドバイザー契約を結んでおり、ジャンルを超えた幅広い見地から、高い芸術性と県民からの親しみやすさを両立させるための企画への助言等を得ている。

当劇場は「コンサートホール」「演劇ホール」「イベントホール」の3つのホールを有し、それぞれのホール特性を最大限に活かした事業を行っている。中でもコンサートホールの音響性能の良さは、国内外の第一線の音楽家からも高い評価を受けており、迫力あるオーケストラから繊細な表現の室内楽の公演まで、優れた鑑賞環境の中で提供することができている。

また、コンサートホールに設置された国産最大級を誇るパイプオルガンを活用するため、オルガン・チェンバロ奏者で東京藝術大学教授の大塚直哉氏にオルガン事業アドバイザーを委嘱し、パイプオルガン・コンサートや、バロック音楽の企画、運営についての助言をもらっている。

令和4年度は、公演事業の10公演のうち7公演において、出演者と共に創り上げたり、オリジナルの脚本を使うことで、宮崎県立芸術劇場の専門性を活かした「宮崎オリジナル」の公演を創造することができた。

以下、令和4年度に実施した事業の内、特に創造的、独創的と認められる事業例

(1) 公演事業

○ シリーズ「ひなたのバロック」

“古楽”と通称される音楽に接することは、単なる演奏の鑑賞だけでなく、西洋の国々の歴史や文化への理解と関心につながる側面を含んでいる。このシリーズではバロック音楽が持つ多様な文化的感興を引き出すプログラムを企画した。

#3「クラヴサンのための音楽とロココの絵画」: バロック期フランスの作品に焦点を当て、美術史家の小林亜起子、古典舞踊家の市瀬陽子をゲストに迎えた、同時代のロココ絵画や宮廷舞踊との共通点を探るプログラム。

#3「テレマンの魅力」: バロック音楽を代表するテレマンの作曲家としての一面にとどまらない“アイディアマン”としての魅力を、ゲストの音楽学者 佐藤康太と共に演奏、トークの両面から探るプログラム。

○ 「新 かぼちゃといもがら物語」#7『神舞の庭』

地域社会に凝縮されている社会課題を背景に、宮崎に生きる人々の営みを描いた演劇の自主創作公演。これまで土田英生氏、長田育恵氏、戌井昭人氏、シライケイタ氏、桑原裕子氏に脚本の執筆を依頼しているが、7年目となる令和4年度は 長田育恵氏による「神舞の庭」を再上演。併せて東京公演を実施した。宮崎県の山間部で代々神楽を受け継ぐ家族の物語は、地域社会が抱える課題、家族の課題を内包しており、多くの観客の共感を得ることができた。また、宮崎を舞台とし、宮崎の方言で演じられるこのシリーズは、作品の質の高さだけでなく、県民にとって舞台芸術をより身近に感じてもらえる効果が高い。このことは、ほかの事業と比べ初めて劇場に来館した人の割合が高いというアンケートの結果（(2) 有効性参照）からもうかがえる。

○ 加藤昌則の「聴かぬなら聴かせてみせよう！クラシック」

「難しい」「敷居が高い」と敬遠されがちなクラシック音楽の魅力や、ピアニスト加藤昌則の軽妙なトークでわかりやすく解説するレクチャーコンサートシリーズ。

#1「信者じゃないのにクリスマス」: 多くの人が耳にするクリスマス・シーズンに流れる音楽を中心に、日常生活の中に入りこんでいる様々なクラシック音楽の源を解き明かすプログラム。

#2「しっとく なっとく まる得クラシック」: クラシック音楽の中でも「室内楽」を取り上げ、ピアノ四重奏の実演を交えながら、「室内楽」の面白さに迫るプログラム。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

宮崎県では、年齢や障がいの有無、居住する地域などにかかわらず、県民誰もが文化に親しむことができる地域社会を目指し、宮崎県文化振興条例が制定された（令和4年3月14日）。その基本理念の中には◆県民が等しく、文化を鑑賞し、参加し、創造することができるようにすること、◆文化に対する県民の関心と理解を深めること、文化の多様性の尊重、◆県民が郷土への誇りと愛着をもって本県の文化を将来に継承できるようにすること、◆子どもに対する文化に関する教育の重要性、等が記されている。

劇場が主催する事業においても、これらの基本理念が達成され、県内の文化芸術が発展していくことを目指している。

令和4年度の当劇場の公演事業では、音楽、演劇、伝統芸能などのジャンルで、解説付きの公演、親子で楽しめる公演、季節に合わせたコンサート、気軽にパイプオルガンの音色を楽しめる公演、ラップの公演等を実施してきた。

●県内演奏家、俳優の起用

「おんがくのおもちゃ箱シリーズ」「加藤昌則の聴かぬなら聴かせてみせよう！クラシック」「新 かぼちゃといもがら物語」#7『神舞の庭』では、県内の演奏家、俳優を起用している。県内芸術家の活躍の場を提供するとともに、観客が舞台芸術をより身近に感じる事ができた。

●県内の地域資源の再発見

「Let's 和の音♪「邦楽と相撲」」では、「相撲」と日本の伝統音楽とのつながりを解き明かしながら、邦楽の面白さを、県内各地で伝承されている「相撲踊り」を紹介することで、県内の伝統芸能の再発見につながった。また、「新 かぼちゃといもがら物語」#7『神舞の庭』では、宮崎の地域文化資源である「神楽」を取り上げ、地域社会において「神楽」の持つ役割が丁寧に描かれていた。同公演は東京（東京芸術劇場）でも上演し、宮崎の地域文化資源の豊かさを発信していくことができた。

『神舞の庭』東京公演の劇評より：「土地の歴史や伝統が人の支えになることを示し、生の再生を描く作品だ。」
（藤原央登 『ミュージック・マガジン』5月号掲載）

●新たなジャンルへの挑戦

「環 ROY『遊ぶことば』」では、劇場初の試みとしてラップのWSと公演を実施したことにより、これまで劇場に足を運んだことのない観客層にアプローチすることができた。来場者参加型の企画も好評で「劇場で環 ROYのパフォーマンスを観ることができるなんて！」といった記載が多かった。

●親子で楽しめる公演

「おんがくのおもちゃ箱シリーズ」「こどももおとなも劇場#7 茂山千五郎家『狂言』」「パイプオルガン プロムナード・コンサート『オルブラ』」では、親子で気軽に音楽や演劇に触れることができ、また子どもたちに良質な舞台芸術を提供している。

●足を運びやすくする工夫

県内で吹奏楽を学ぶ中・高校生に、質の高い演奏を聴いてもらうことを目的とした「THE SIXTH SENSE」、を企画、またクリスマスの時期には「加藤昌則の『聴かぬならきかせてみせよう！クラシック』#1」「パイプオルガン プロムナード・コンサート『オルブラ』vol.173」を、新年には、「ニュー・イヤー・コンサート2023 ～ピアノ・ザ・ファイナル～」で新年の幕開けを彩るなど、季節を感じる企画でコンサートへの来場意欲を高めることができた。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

宮崎県立芸術劇場は、平成5年に「県民文化の拠点として、舞台芸術を中心に県民の多様な文化活動を促進し、文化の香り高い地域づくりと心豊かな県民生活の創造 に寄与すること」を目的に設置され、当財団は設置当初よりその運営を委託されている。（平成18年より指定管理者制度導入）

(1) 妥当性 において記したとおり、現在は、第四期指定管理事業計画の「より親しみやすく」「裾野を広げる」と、みやざき文化振興ビジョンが掲げる「文化で築く みやざきの新しいゆたかさの実現」のための事業活動を展開している。

更に、(2) 有効性 にも記したとおり、事業終了後は、公益性、共感性、普及性、実現性、計画性、自立性、先駆性の7項目についての自己評価を行っているが、その結果を受け、企画内容、広報戦略、価格設定等改善すべき事項については、次年度に反映させていくことで、事業の目的の達成に向けた活動を持続的に発展させている。

上記事業運営を確実なものとするために、人事戦略面では「専門スタッフの確保育成、総合職の育成」を、財政面では「自主財源の確保および効率的な管理運営」を、管理運営面では「安全管理、危機管理の徹底」を運営の基盤としている。

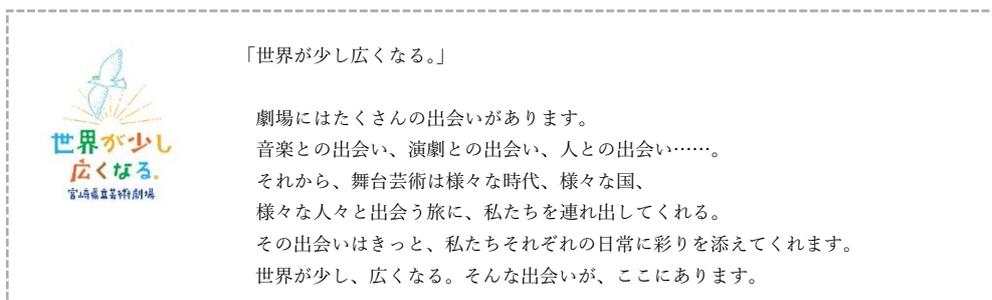
特に財政面では、令和3年度決算において、当劇場の運営費（管理費、人件費等含む）の約65%を県からの指定管理料が占めており、残り35%が入場料収入、補助金収入、協賛金等収入となっている。このように組織運営の持続的発展のためには自主財源の確保＝補助金・助成金の獲得が必要不可欠であり、今後も公的・私的の各種補助金、助成金の獲得に努めていくこととしている。

人事面では、採用後3年を経過した職員は、無期雇用へと移行していくことで、職員が長期的な展望のもとに業務を遂行することができるようにしている。

●劇場キャッチフレーズの制定

令和3年度からの指定管理第四期が始まるのにあわせて、劇場が県民にとってより身近で、親しまれるものであるとともに、“世界が少し広がる” ような出会いがたくさん訪れる、そんな存在でありたいと願い、劇場キャッチフレーズを制定した。

劇場ホームページに加え、各事業のチラシにも掲載していくことで、劇場の姿勢を発信し、県民への周知を図っている。



●各方面とのネットワーク

当劇場は、宮崎県の中核をなす文化施設として宮崎県公立文化施設協議会の会長館を務め、全国公立文化施設協会、劇場・音楽等連絡協議会等に参加している。また、全国規模の巡回公演を実施する際には、各実施館との情報交換を行うなど、劇場・音楽堂等間のネットワーク形成・強化に取り組んでいる。新型コロナウイルス感染症の感染対策や大規模改修等の情報収集時において、これまでに築いてきたネットワークが有効に機能する機会が多く、今後の劇場運営の持続性を高めるためにもこうしたネットワークの維持やさらなる活用を図っていきたい。